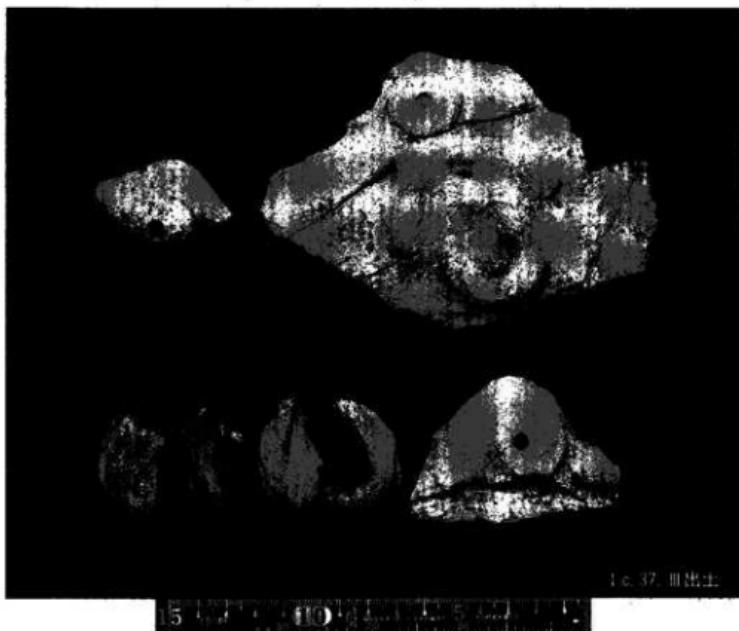


森田村埋蔵文化財シリーズ 第5集

玉井(1)遺跡

—農道造成にかかる事前調査—
(本格調査)



Excavation Report on the Jyōmon age Tamai(1) a・b・c site

1996・12・31

青森県西津軽郡森田村教育委員会

- 1) 1970年 『石神遺跡』 江坂輝弥
- 2) 1974年 『円筒土器文化』 村越 潤(雄山閣)
- 3) 1976年 『北奥古代文化』 8号 平山久夫
- 4) 1994年 『玉井(1)遺跡』(予備調査) 新谷雄哉
- 5) 1996年 『玉井(1)遺跡』(本格調査) 新谷雄哉

—序文—

三内丸山遺跡は現在全国的に話題になっており、縄文文化解明の貴重な遺跡として脚光を浴びています。

我が森田村にも三内丸山遺跡と同時代の石神遺跡があり、そこから発掘された円筒式土器等が森田村歴史民俗資料館に保存されております。その中の219点が国的重要文化財、3点が県の重要文化財に指定されています。また円筒式土器を下層から上層まで学問的・系統的に分類して陳列し、考古学の研究上では非常に貴重且つ重要な土器として関係各方面から高く評価され注目されています。

森田村教育委員会としても、この貴重な土器を多くの人に知っていただく為に、円筒式土器の図鑑を作成すべく作業を進めているところであります。

本報告書は、玉井(1)遺跡の農道造成に関わる土地として、平成6年に試掘をし、今年度は本格的に発掘調査したところであります。出土した遺物としては縄文土器が多く、他には土師器・須恵器、それに石器等が出土しております。また遺構としては土壙・酸化鉄帯・白色粘土堆・柱穴等が検出されており、縄文中期・後期並びに奈良・平安時代の二重構造を持つ遺跡であります。

発掘者の皆さん方は石神遺跡との関連を期待していたようですが、それが見られなかつたようあります。石神遺跡については、今年度から試掘・発掘を計画的にすることになっていますが期待をしたいと思っています。

本発掘にあたっては、発掘者並びに関係者のご理解・ご協力をいただき、無事に終えることができたことに感謝申し上げ序文と致します。

森田村教育委員会

教育長 石田 荣市

【例 言】

- 1) この報告書は、森田村教育委員会(同建設課)が発掘調査した農道造成にかかる事前調査(本格調査)の記録である。
- 2) 玉井(1)遺跡は、遺跡台帳にも記載された周知の遺跡であるが、この遺跡のうち、a 地点・b 地点・c 地点は、予備調査の段階において判明した遺物の包蔵地である。
- 3) 各トレンチのセクション図・平面図は、調査員が手分けをして作成したが、原図は、総て 20 分の 1 で作成した。各図面には念のためスケールを入れてある。
- 4) 地学に関する事項、石質の鑑定は、調査員川村真一が担当した。
- 5) 報告書の作成、及び写真の撮影等一切は、新谷雄蔵が担当した。
- 6) 出土遺物の一切は森田村歴史民俗資料館に展示して村民の歴史研究の資料にする。
- 7) 末尾ながら青森県埋蔵文化財調査センター、県立板柳高校の地学担当者の助言を戴いた。ここに記して謝意を表する。

【目 次】

・表 紙	
・序 文	1
・例 言	2
〔1〕 発掘要項 5	
第1図 遺跡付近地形図(付農道予定地)	6
〔2〕 地形・地質 7	
(1) 地 形	7
(2) 地 質	7
A地区	
第2図 A地区柱状図	7
B地区	
第3図 B地区柱状図	8
C地区	
第4図 C地区柱状図	8
〔3〕 調査の経過 9	
第5図～第7図 トレンチ配置図(1 a・1 b・1 c 地点)	11
〔4〕 検出した遺構 13	
a) 土 壤	14
第8図 上墻平面図	14
b) 酸化鉄帶	15
第9図 酸化鉄帶平面図	15
c) ローム堆	16
第10図 ローム堆平面図	16
d) 配石遺構	17
第11図 配石遺構平面図	17
e) 柱 穴	18
第12図 柱穴平面図	18

[5] セクション図について	19
第13図 1 a 地点(51G)	19
第14図 1 b 地点(28TR)	20
第15図 1 c 地点(41・43・45)	21
第16図 1 c 地点(41・43・49)	22
[6] 出土遺物	23
a) 円筒上器系	23
b) 大木系上器	23
c) 後期の土器	23
d) 弥生(前期)の土器	23
e) 円盤状土製品	24
f) 骨類	24
g) 須恵器	24
h) 土師器	24
[7] 図版(拓影図)	26
[8] 写真	39

(1) 発掘要項

a) 発掘主体者 森田村教育委員会 代表 教育長 石田 荘市
教育次長 鶴賀 威
社教係長 山谷 敬二
建設課 課長 原田 豊彦
係長 佐藤 幸徳

b) 調査担当者 日本考古学協会会員 新谷 雄藏

c) 調査員 日本地学教育学会員 川村 真一
北奥文化研究会副会長 永沢 秀夫
元車力中学校長 清野 真人
北奥文化研究会事務局長 小山 英治
北奥文化研究会員 桜庭 健司

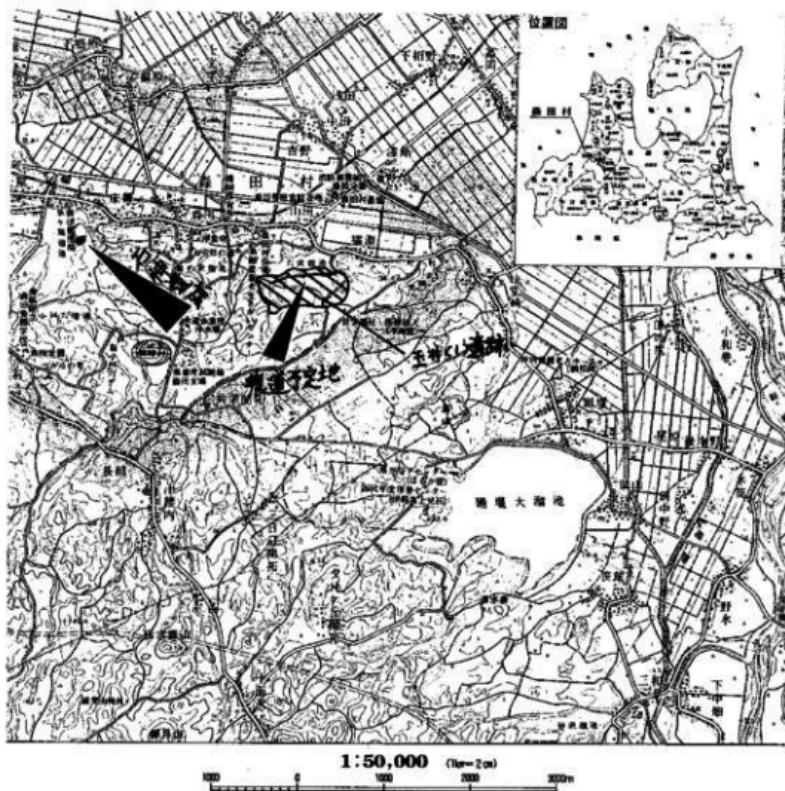
d) 遺跡の所在地………青森県西津軽郡大字森田字玉井 62~78

e) 発掘法……………トレンチ法及びグリッド法による。

f) 発掘面積…………約 437 平方メートル

報告書の作成は、森田村教育委員会及び森田村建設課の委嘱によって新谷雄藏が
担当する。

〈第1図〉森田村管内図



(2) 地形・地質

(1) 地形

本遺跡は森田村の東方、台地北縁に位置する六沢溜池の西岸にある。遺跡のある台地は山田野台地と呼ばれており、岩木山火山地と津軽平野との間に分布している。その分布は廻堰溜池南方、共栄開拓、県立農業指導所、月見野園、勝山、と岩木山北面に帯状に連なっている。台地面は上位面・中位面・下位面の3地形面に分けられており、下位面の一部を除いていずれも海成の段丘面である。遺跡は中位面にあり、周辺の面の標高は20~40mである。なお、この段丘面は西海岸や岩木川沿岸に発達する中位段丘につながるもので、山田野段丘といわれている。

遺跡周辺には名前のついていない小河川が数本あるが、大方は北流ないし西流し段丘面を侵食しながら六沢溜池をつくる主要河川に注いでいる。

(2) 地質

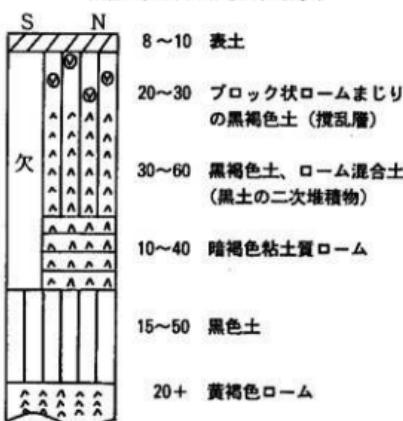
遺跡付近の段丘構成層は、下位から帶紫色の安山岩・褐色のシルト岩の巨礫～中礫を含む黄褐色凝灰質細粒砂岩・安山岩やまれに黒曜石の中礫をふくむ含礫凝灰質細粒砂岩、桃褐色凝灰質中粒砂岩・褐色粘土・黄色ないし褐色ロームとなっている。

次に地区別に地質の構成および基本層序について述べる。

【A地区】

北側は段丘崖になっているため、黄褐色ロームからなる基盤の傾斜に沿って上位の黒土層が堆積し末端に近いほど厚くなっている。なお、崖面に近いところでは黒土層の上に基盤のローム、黒土の風化移動した二次的堆積層が重なっている。この地区的地質断面を模式的に示すと、右のとおりである。

〈第2図〉 A地区柱状図

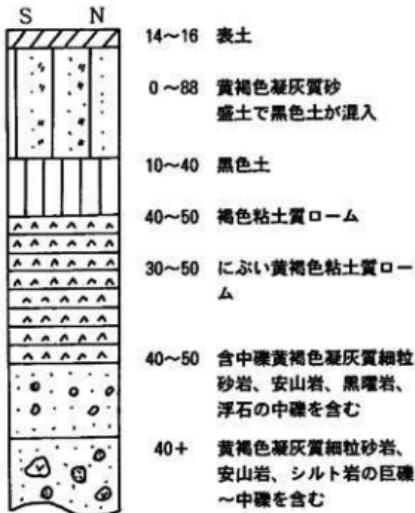


〈第3図〉 B地区 柱状図

[B地区]

B地区一帯は六沢溜池の西岸に面しており、りんご園の一部となっている。もともとの地形は南側から溜池へ向かって傾斜していたが、りんご園の造成にあたって南側の高い方を削平した土を低い方に埋めたために、原地形を覆っていた黒土層の上に移動攪乱層と現在の黒土が重なっている。

トレント19のあたりでは溜池の湾入部にあたっており、青白色の粘土層がみられた。トレント25~28における模式的地質断面を、右に示すことにする。

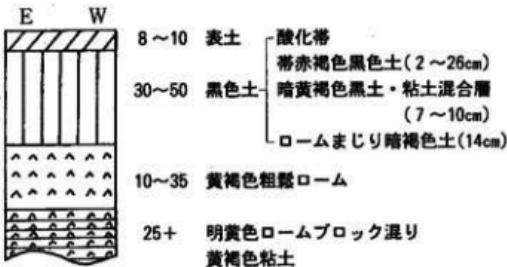


[C地区]

C地区的西側に、りんご園の南から北に向けて小高い堤防状の地形が連なっている。グリッド43を中心とおっているが、その断面は周囲に比べ幅約15m、高さ約1.5mの凸形を呈している。この地形の末端は、グリッド43、トレント44で、そこには長さ3m、幅1m程の大きさのロームブロックが数塊、径20cmから50cmまれに1mを越すおびただしい躙が見られる。

これらの岩塊や躙は、地すべりによって運ばれたものと考えられ、凸形を示す地形は地すべりによってできたものであろう。

〈第4図〉 C地区 柱状図



この地区のもう一つの特徴は、著しい酸化帯がみられることである。

この地区の北側は杉山である。この杉山とグリッド 35 の間は谷地形をなしている。

グリッド 34 の東半分とグリッド 35 の西半分の間の南側には堅い白色の粘土層がみられ、それ以外の広範囲の部分は、黒土層が酸化作用を受け、暗褐色に変色し固化している。この酸化作用は沼沢地状になっていた当時の鉄バクテリアによる酸化鉄(褐鉄鉱)の生成によるものであろう。

なお、固化している一部では褐鉄鉱がみられた。酸化帯の方向は N27W を示し、かつての谷筋とほぼ一致している。

C 地区地質の断面を前頁に示すことにする。

(3) 調査の経過(トレンチ配置図第 5~7 図)

『玉井遺跡』は、1a・1b・1c の 3 地点に分けられる。これは予備調査の段階において明確になったものであるが、本格的な調査では、この 3 地点に絞って発掘調査することにした。

最初に調査したのは、1b 地点であるが、この地点は、予備調査の段階である。

即ち、地主さんの説明によって、山を崩してりんご園を造成している、との聞き取り調査であったので、予備調査の段階では調査を除外したものである。

そこで溜池の諸近くには平坦地があったので、崖を利用してカッティングを試みた。その結果、地表下約 2 m 下には平坦地があってそこが黒土層であった。そのためユンボーを利用して 10Tr・19Tr・28Tr を発掘調査した。

また、Tr31 では、普通どおりの発掘調査をしたが、出土遺物は、上師器が 2 点、須恵器が 1 点、繩文土器が 1 点の出上で、それぞれ年代が異なることから紛れ込んだものと判断した。

1b 地点は、さきに述べたとおり、Tr31 のみは普通どおりの発掘であるが、また 1b 地点は、トレンチの数で Tr1~31 であった。(第 5~7 図参照)

次に 1c 地点に発掘の手をのばした。1c 地点は、予備調査を経過しているので遺物の山上ははっきりしていた。そのため遺構の出土が気がかりであった。

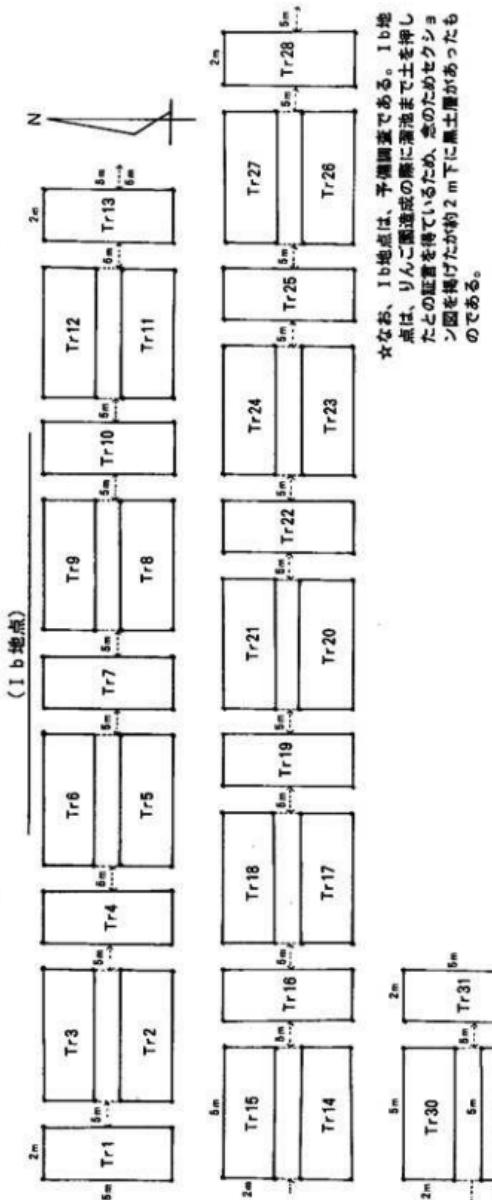
この地点は、本格調査である。

この地点はグリッド、トレンチで拡張区を含めて Tr32 からグリッド 50 までとした。

即ち東西5m、南北5mのグリッド、及び東西5m×南北3mのグリッドの2種類とし、トレンチは、東西2m×南北5mとして設定した。(第7図参照)

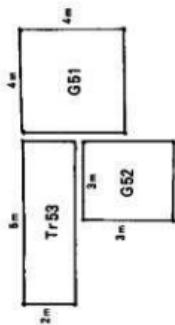
- ・出土した遺物は、縄文土器がすべてで、他に土師器^{はじき}が1点、須恵器^{すえき}が1点、その他、縄文時代の石器が出土した。
 - ・検出した遺構は、上塙が4基、酸化鉄帯が1基、白色粘土堆が1基、ローム堆が1基、柱穴が2個検出された。出土遺物の中には円筒土器系が約10%、十腰内I式土器が約10%で、主体は、約80%の大木系土器が主流を占めていた。
- 『石神遺跡』は、約2kmの近くにあるのに、われわれはその点が期待外れであった。
- ・次に1a地点を発掘することにした。第6図に示すとおり、グリッド2カ所と、トレンチ1カ所の小規模であるが、全面発掘である。(予備調査の段階で調査してあるので……) なお、調査区の東側には製鉄遺跡が所在する。
 - ・この1a地点からは、円筒土器系の土器が出土したが主として前期・中期の土器群であった。『石神遺跡』に近いことが印象づけられた。

〈第5図〉(I a 地点・I b 地点 グリッド・トレンチ配置図) $S = \frac{1}{100}$

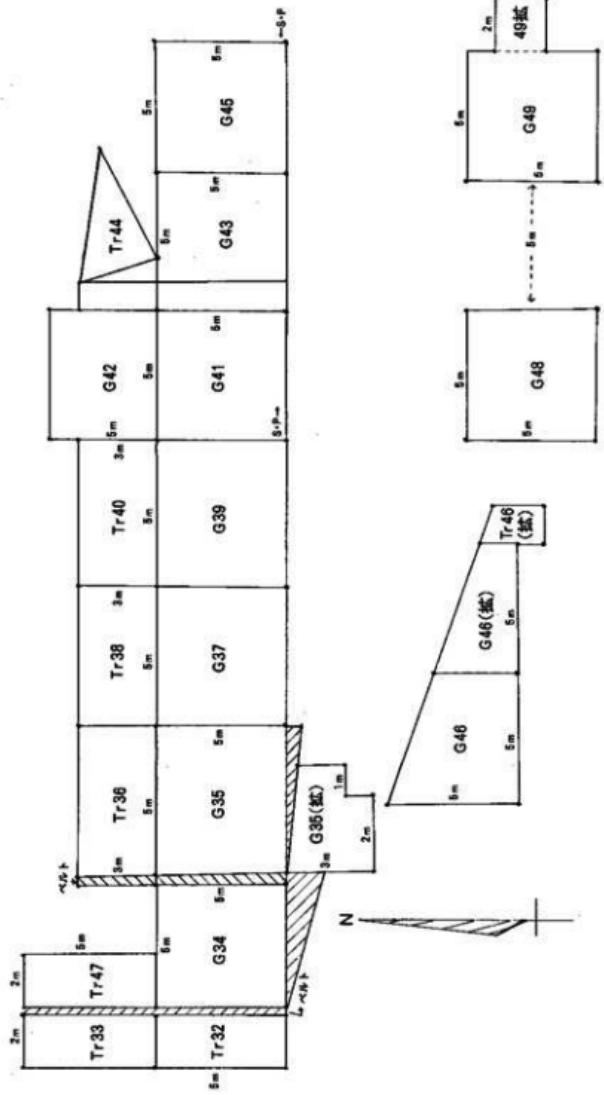


☆なお、Ib地点は、予備調査である。Ib地点は、りんご園造成の際に泥沼まで土を押したとの証言を得ているため、余のためセクション図を掲げたが約2m下に黒土層があつたものである。

〈第6図〉((I a 地点) グリッド・トレンチ配置図) $S = \frac{1}{100}$



〈第7図〉 [Ic 地点 グリッド・トレンチ配置図] $S = \frac{1}{20}$



*この Ic 地点は、全面実測である。(ため)

[4] 検出した遺構

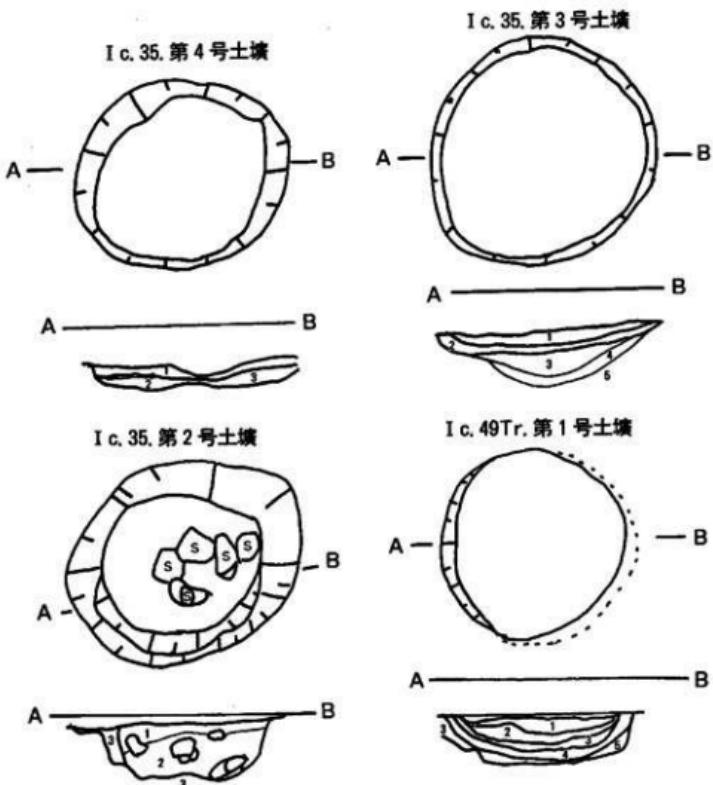
- ・検出した遺構は、次のとおりである。

土壌 - 4 基(第8図)・白色粘土堆 - 1 ・酸化鉄帯 - 1 (第9図)

ローム堆 - 1 基(第10図)・配石遺構 - 3 (第11図)・柱穴 - 2 個(第12図)

- ・土壌は、全部で 4 基の出土である。このうち 1 号～3 号としたものは 1c 地区の 35 グリッドで III 層上面で検出した。残りの 1 基は、これもグリッド 49 の III 層上面で検出されたものである。
- ・酸化鉄帯 - このものは、Tr35 の拡張区において検出されたものである。第9図に示したとおりであるが付近には白色粘土が堆積していた。酸化鉄帯は、水の中に含まれた鉄分が長い年月にわたって浸透したものとと思われる。(III層出土) また、白色粘土層の厚さは約 5 ～ 7 cm と観察した。
- ・ローム堆(第10図)このものは、1c 地区の 41・43 グリッドの II 層上面で検出されたものであるが、多分流れ込んだもののように観察した。
- ・42・43・44 の各グリッドにわたって配石遺構 ^{はいせきいこう}が検出された。この遺構は第11図に示したとおりであるが溜池の近くになるにつれて細かくなるようである。
- ・この 1c 地区とした地点は、土の移動が殆どなされておらず、聞き取り調査では移動は無く、発掘所見でも皆無であった。
- ・柱穴は、僅か 2 個の検出である。1c 地区の 36・38 グリッドで III 層から検出された。深さは 38 グリッドのものは 34cm、36 グリッドのものは 45cm と深かった(第12図)。予備調査の段階を含めると、溝や Pit があって中央のりんご園には何らかの遺構があるようと思う。

a) 土 壤 〈第8図〉(土壤平面図)



〈注記〉第1号土壤

1-10YR2/2 黒褐色土、粒子細かく粘・
湿ともにある。

2-10YR4/3 にぶい黒褐色土、粒子細か
く、粘・湿ともに大である。黑色土とロー
ムの混合層である。

3-10YR7/6 明黄褐色土、ベースである。

〈注記〉第2号土壤

1-10YR1.7/1 黒色土、粒子細かく粘・
湿なく、さらさらしている。木根若干混
入する。

2-10YR2/2 黒褐色土、粒子細かく、粘・
湿ともにあり、ベースである。

〈注記〉第3号・4号土壤

1-10YR3/1 黒褐色土、粒子粗く、さら
さらしており粘・湿ともに若干あり、こ
の層より土器出土。

2-10YR3/1 黒褐色土、粒子やや細かく
粘・湿ともにあり、この層の北部に炭化
物が相当量混入している。

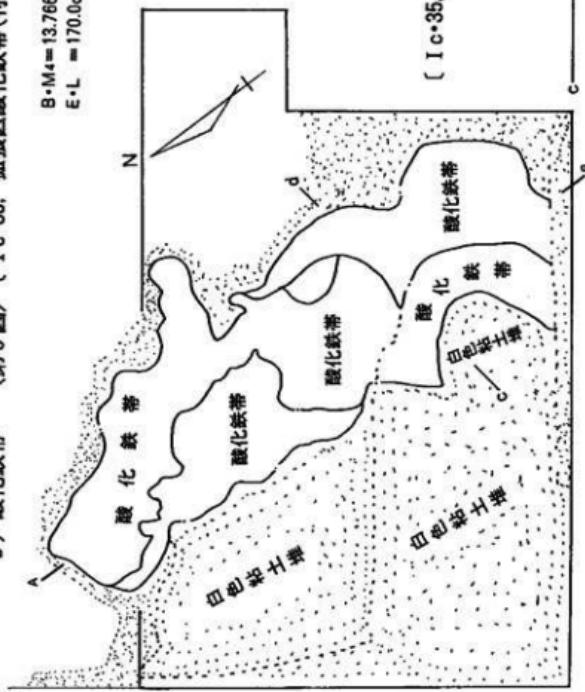
3-10YR2/2 黒褐色土、粒子やや細かく、
粘性・湿性ともに相当ある。

4-10YR2/3 黒褐色土、粒子細かく、粘・
湿ともに強く、この層に約20%程度の炭
化物が混入する。

5-10YR4/2 灰黄褐色土、粒子細かく、
粘・湿あり、この遺構のベースである。

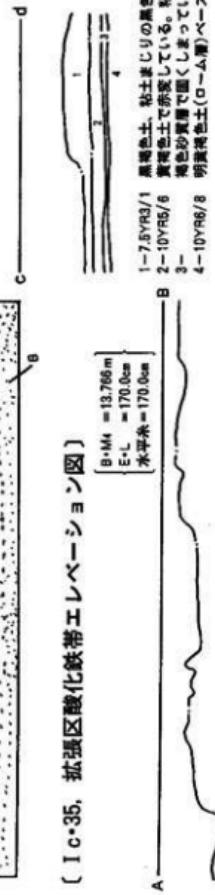
b) 酸化鉄帯 <第9図> [Ic-35, 拡張区酸化鉄帯(付白色粘土堆)平面図] S = $\frac{1}{20}$

$$E \cdot L = 170.0 \text{ cm}$$



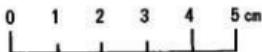
〔Ic-35. 拡張区酸化鉄帶セクション図〕

$$\left. \begin{array}{l} B+M_4 = 13.766 \text{ m} \\ E+L = 170.0 \text{ cm} \\ \text{水平差} = 222.0 \text{ cm} \end{array} \right\}$$



c) ローム堆 〈第10図〉 [ローム堆平面図] (付地盤高) $S = \frac{1}{20}$

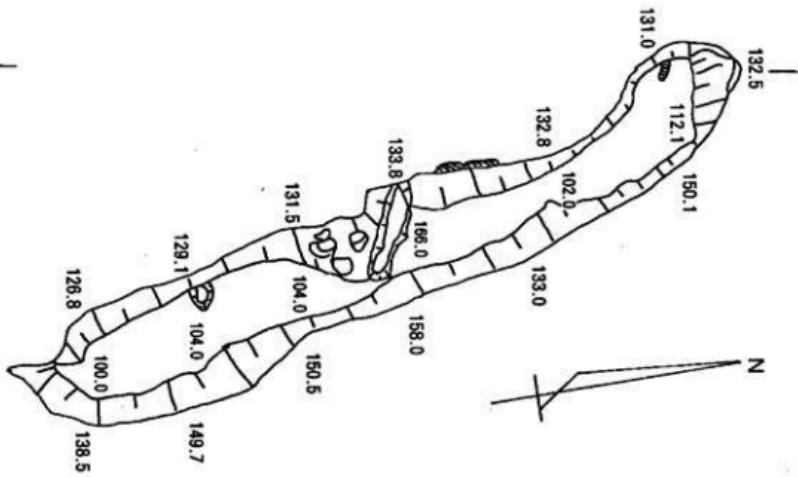
B・M4 = 13.766m
E・L = 100.0cm



I c.41+43グリット [ローム堆平面図]

☆層序の注記

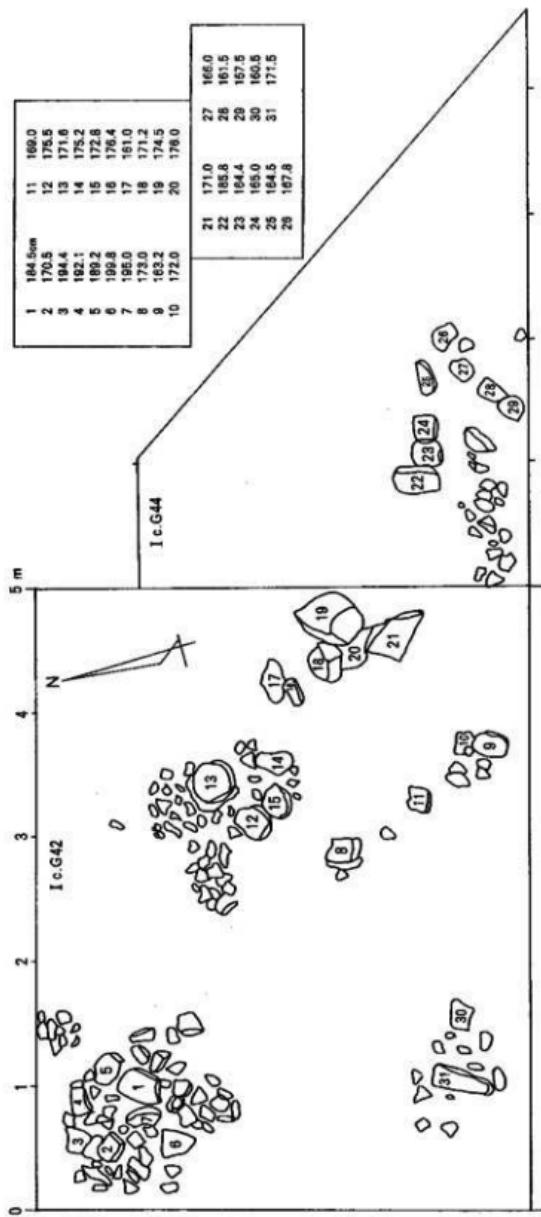
II → 10YR5/4 にぶい黄褐色土、粒子粗く、さらさらしておあり、粘質・湿性ともに中程度ある。ところどころに木根あり、また、径3~5cmの風化した安山岩が見られる。



d) 配石遺構 <第11図> (Ic・42-44, 配石遺構実測図)

$$S = \frac{1}{20}$$

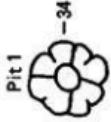
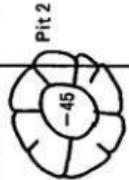
B・M・1=13.766m
E・L = 100.0cm



e) 柱穴 <第12図> [柱穴平面図] $S = \frac{1}{20}$

Ic. 38

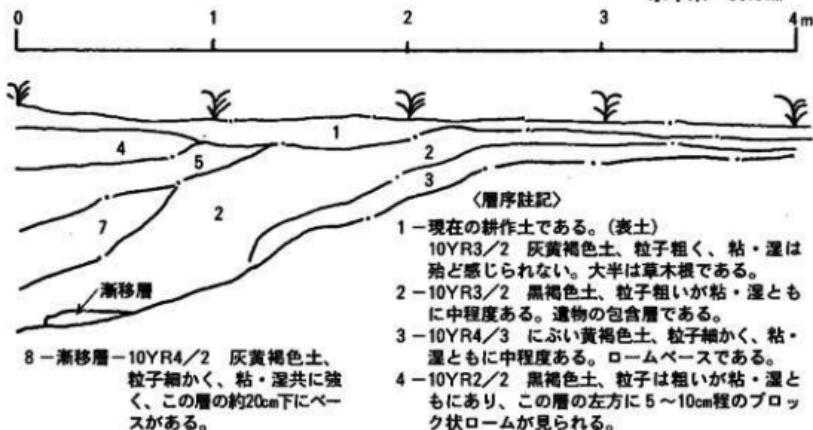
Ic. 36 ↑



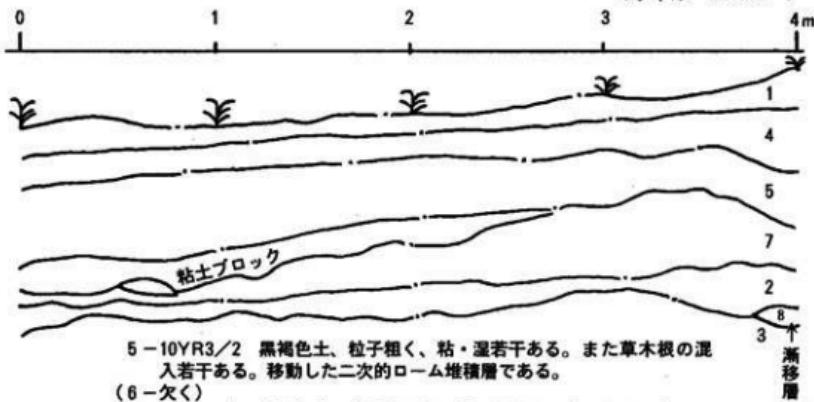
(5) セクション図について (第13~16図)

セクション図については、第13~16図に『標準土色帖』を活用し、記入しているので省略する。

〈第13図〉 [I a+G51, 東壁セクション図] $S = \frac{1}{20}$ $B \cdot M_5 = 17.321\text{m}$
 $E \cdot L = 100.0\text{cm}$ 水平糸 = 60.0cm



[I a+G51, 北壁セクション図] $S = \frac{1}{20}$ $\left\{ \begin{array}{l} B \cdot M_5 = 17.321\text{m} \\ E \cdot L = 100.0\text{cm} \\ \text{水平糸} = 60.0\text{cm} \end{array} \right\}$



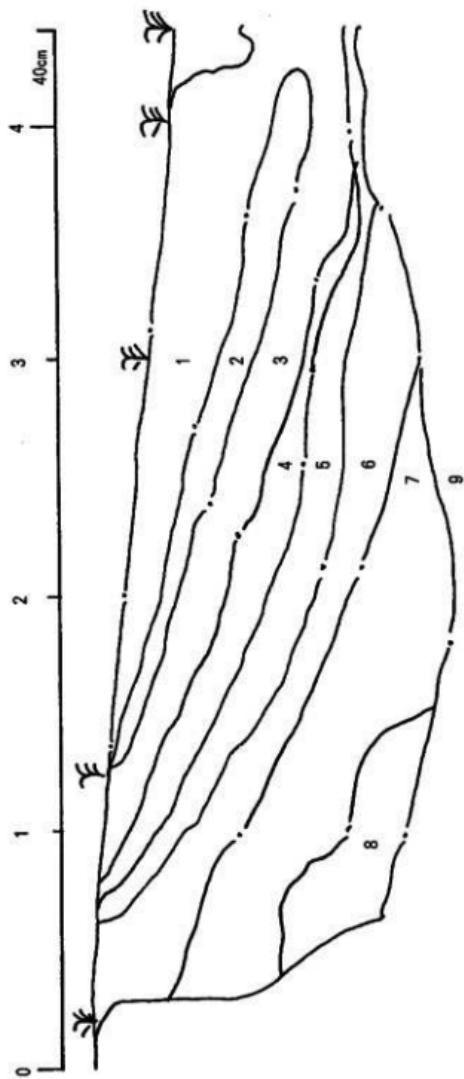
5 - 10YR3/2 黑褐色土、粒子粗く、粘・湿若干ある。また草木根の混入若干ある。移動した二次的ローム堆積層である。

(6-欠く)

7 - 10YR3/4 暗褐色土、粒子細かく、粘・湿ともに大である。若干の草木根が見られる。

〈第14図〉 [1b・Tr28, 西壁セクション図] $S = -\frac{1}{20}$

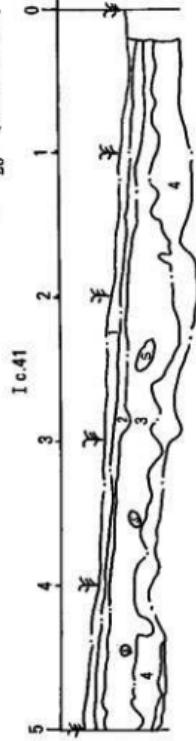
$$\left\{ \begin{array}{l} B \cdot M_3 = 15.116 \text{m} \\ E \cdot L = 100 \text{cm} \\ \text{水平糸} = 87.0 \text{cm} \end{array} \right\}$$



- 1-現在の耕作土である。黒褐色土。
2-10YR4/6 棕色土、粒子粗くさらさらしている。
3-7.5YR4/6 棕色土、粒子細かく、粘・湿とともにあり、この層も以前に撒入された土である。
4-7.5YR4/4 棕色土、粒子細かく粘・湿ともにある。
5-7.5YR5/4 にぶい褐色土、粒子粗くさらさりしている。
6-10YR5/4 黄褐色土、粒子粗く粘・湿ともに若干ある。
- 7-10YR5/4 にぶい黄褐色土、粒子細いか粘・湿ともにあ
る。ところどころに5YR1/8の赤褐色土(ロ
ームが酸化したもの)が見受けられる。
8-7.5YR6/8 棕色土、粒子細かく粘・湿ともにあり、砂も
若干混入している。
9-10YR3/4 暗褐色土、粒子は粗いか粘・湿ともにあり、
以前に撒入されたものか?

〈第15図〉 [Ic・41・43・45, 南壁セクション図]

$$S = \frac{1}{20}$$



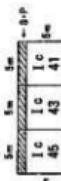
(注記)

1-現在の耕作土である。
2-10YR2/1 黒色土で粒子細かく、
粘・塑共にあり(小程度)、全体に
わたって草木根が進入している。
3-10YR1.7/1 黑色土で粒子細かく、
さらさらしており、粘・塑ともに
少ない。

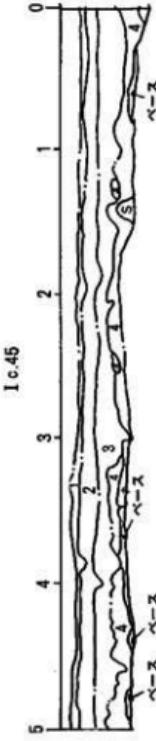
この層の下部には、少量の石質
根が見られる。なお、木根の混入
も見られる。

4-10YR4/3 にぶい黄褐色土、粒子
が細かく、粘性・塑性ともに大で
ある。漸移層であるため、上部は、
前々層と同様、下部に近い黄褐色土
の色をしていている。

5-10YR5/8 黄褐色土、透性は、中
程度であるが、粘性は強く、この
運動のベースである。



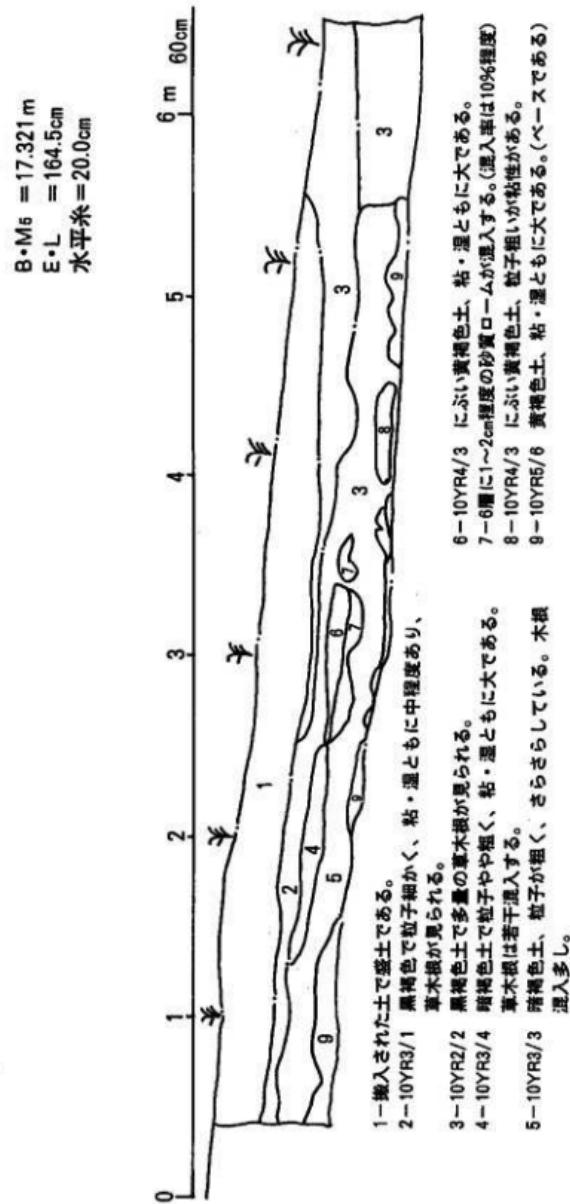
5-



1c.45



〈第16図〉 [Ic・49, 東壁セクション図] $S = \frac{1}{20}$



(6) 出土遺物 (図版1~13・写真1~11参照)

一番出土遺物の多かったのは大木系の上器であった概算で恐らく80%程度のものと思われる。残りの10%は縄文時代の後期の土器で、との10%は、円筒土器系のものである。

a) 円筒土器系

第一群上器 (前期の土器 - 円筒下層b式土器 - 3類)

第二群土器 (前期 - 円筒下層d1式土器)

第三群上器 (中期の土器 - 円筒上層a式土器)

第四群土器 (中期の上器 - 円筒上層b式土器)

b) 大木系土器 - 第五群土器 (中期末の上器)

この土器群は、1~10式に分けられ、しかもI式、2a、2b、3、4、5、6、以上が前期。糠塚、7a、7b、8a、8b、9、10式に分類されるが、以上が中期末のものである。東北地方の南部で栄えた上器群であって、何分破片のため、ここでは、中期末として一括しておくことにする。

これらの上器群は、胎土が円筒土器に比して精選され、固くしまっており、円筒土器より、すぐれているもので、円筒上器よりも進歩したものようである。

また、純粹な人木式土器ではなく、大木系としたのは、円筒土器とミックスして化成したものらしいのである。(表紙としたものは1c地点の35~37グリッドのIII層から出土した、大木系の上器である。)

c) 後期の土器

第六群上器(十腰内I式土器)

第七群土器(十腰内I・II式の中間型式)

第八群上器(十腰内II式土器)

後期の上器は、『十腰内遺跡』を標式遺跡として、十腰内I群~VI群土器に型式ごとに分類されるが、その後北海道松前町教育委員会による『白坂遺跡』の発掘調査によつて、その新資料を加え、十腰内I式土器・I・II式の中間型式・及びIII・IV・V・VI式(VI式は、縄文晚期)としたものである。

d) 第九群土器(砂沢式土器 - 弥生前期)

弥生期は、b・c 300~100年、b・c 100~A・D 100、A・D 100~300年が、それぞれ前期・中期・後期に分けられる。砂沢式土器は、弥生時代の前期に相当する。

e) 円盤状土製品

6個－このうち1個は、十腰内I式土器片である。他は型式不明であった。

f) 骨類

2片の出土である。このうち、1片は馬の骨であろうか？

g) 須恵器－壺形須恵器－

1片の出土である。

h) 土師器－壺形土師器－

1片の出土である。

g)、h) 即ち、須恵器・土師器は、それぞれ10世紀、11世紀のもので、共に平安時代のものである。

出土遺物は、a)～g)にわたるものであるが、さきにも触れたように円筒土器が少なく、大木系土器の出土が多い。

【参考文献】

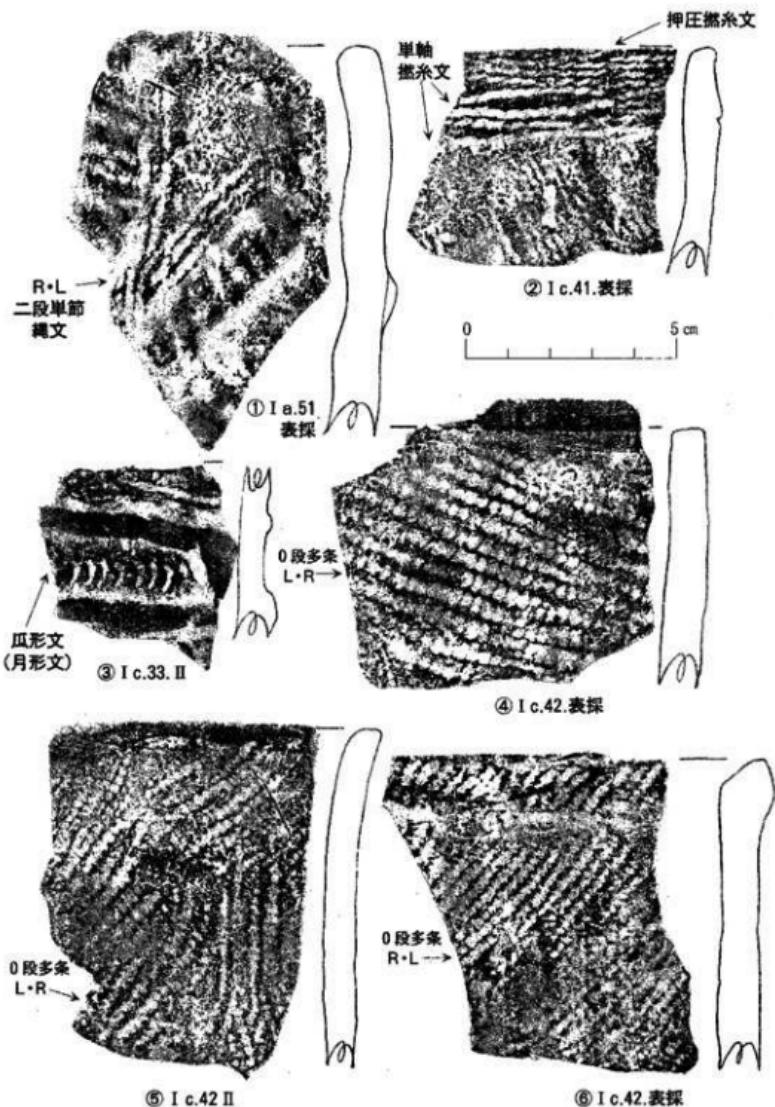
- 1) 1970年『石神遺跡』 森田村教育委員会
- 2) 1974年『円筒土器文化』 雄山湖
- 3) 『白坂』 北海道松前町教育委員会
- 4) 1975年『泉山遺跡発掘調査報告書』 青森県教育委員会
- 5) 1975年『北奥古代文化』 8号 北奥古代文化研究会
- 6) 1990年『砂沢遺跡』 青森県弘前市教育委員会
- 7) 写真集『大木式土器』(私家版)による。
- 8) 1968年『岩木山』 岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書 岩木山刊行会
- 9) 1974年『砂沢系土器の分類的研究』 北奥文化研究会－第7号
- 10) 1992年『観音林遺跡』第1～第10次発掘報告書 五所川原市教育委員会
- 11) その他 省略

図版1 [円筒系] -その1-



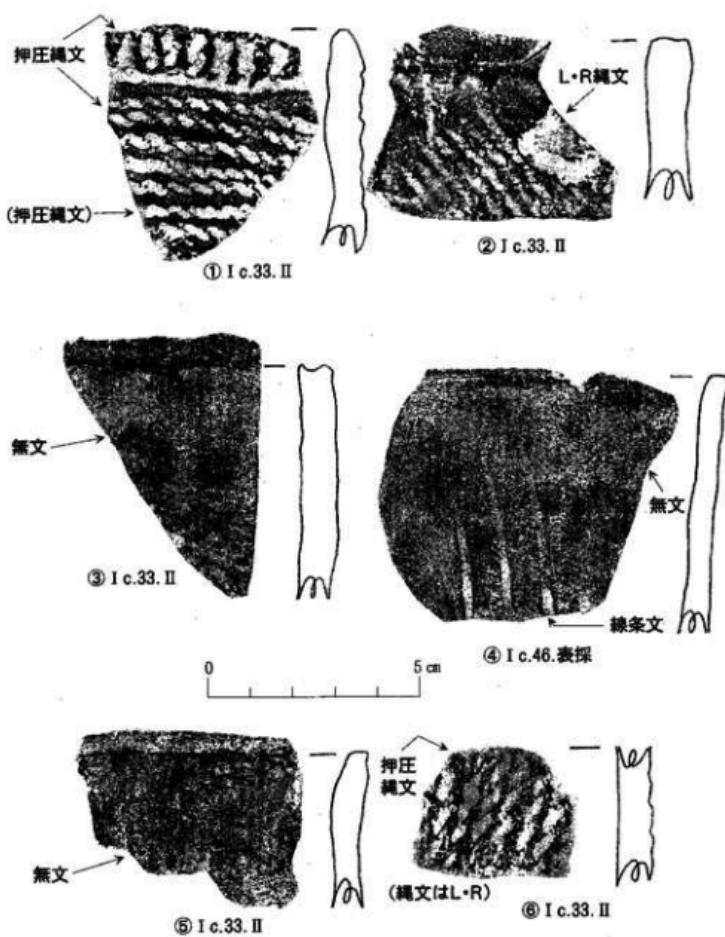
①～④→前期の土器、③・⑤⑥→中期の土器

図版2 [円筒系] -その2-



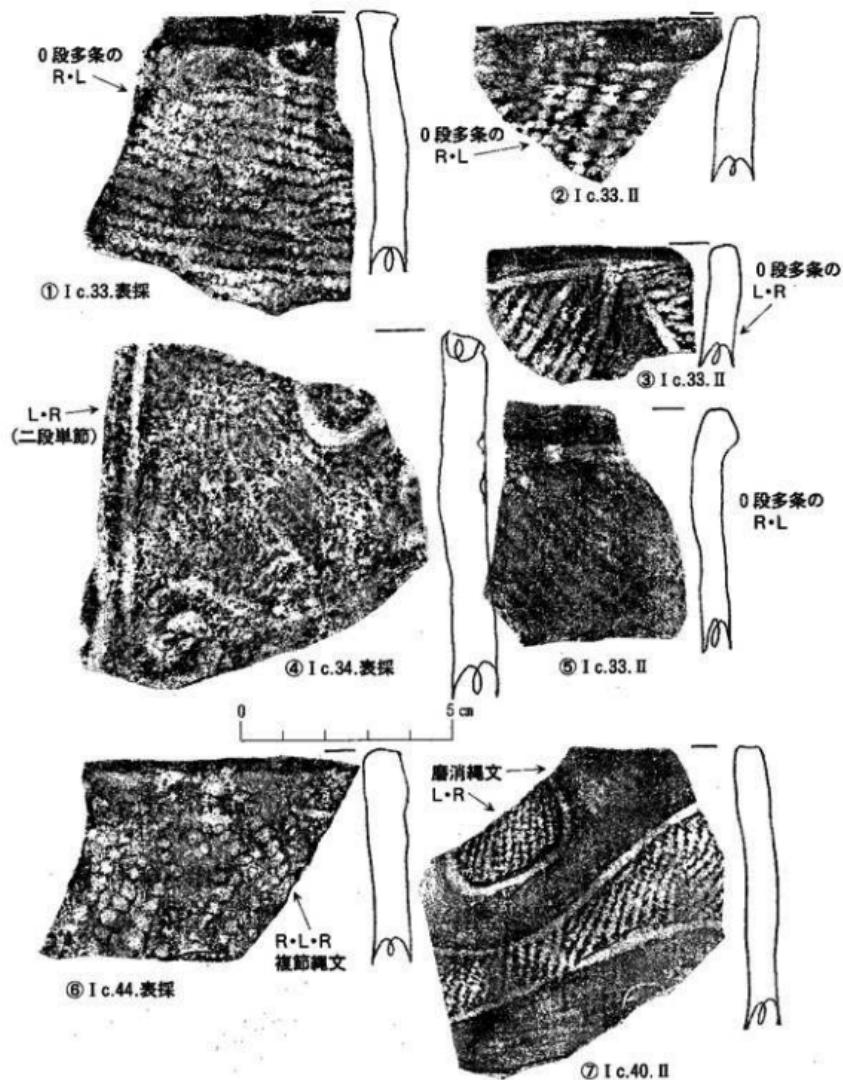
②前期の土器(円下d1式)、①③⑤⑥→中期の土器

図版3 [円筒系・後期の土器]



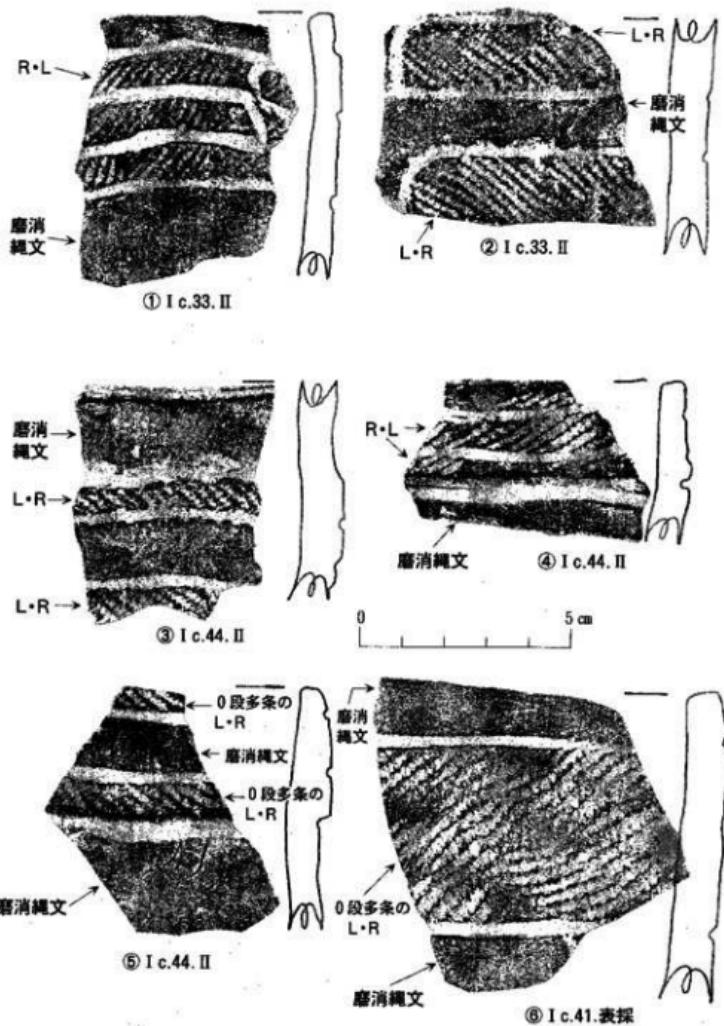
①⑥→中期の土器、②～⑤→後期の土器

図版4【大木系】-その1-



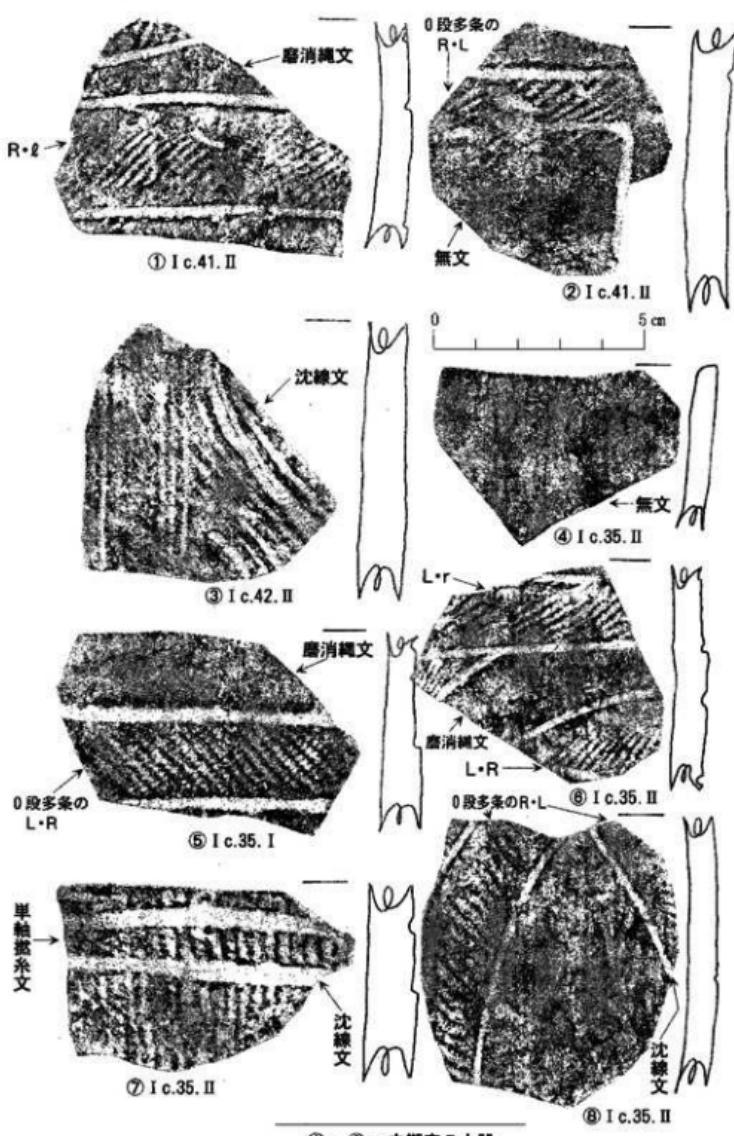
①④→後期の土器、②③→中期末の土器、④⑦→中期末の土器、⑤中期の土器

図版5 [大木系] -その2-

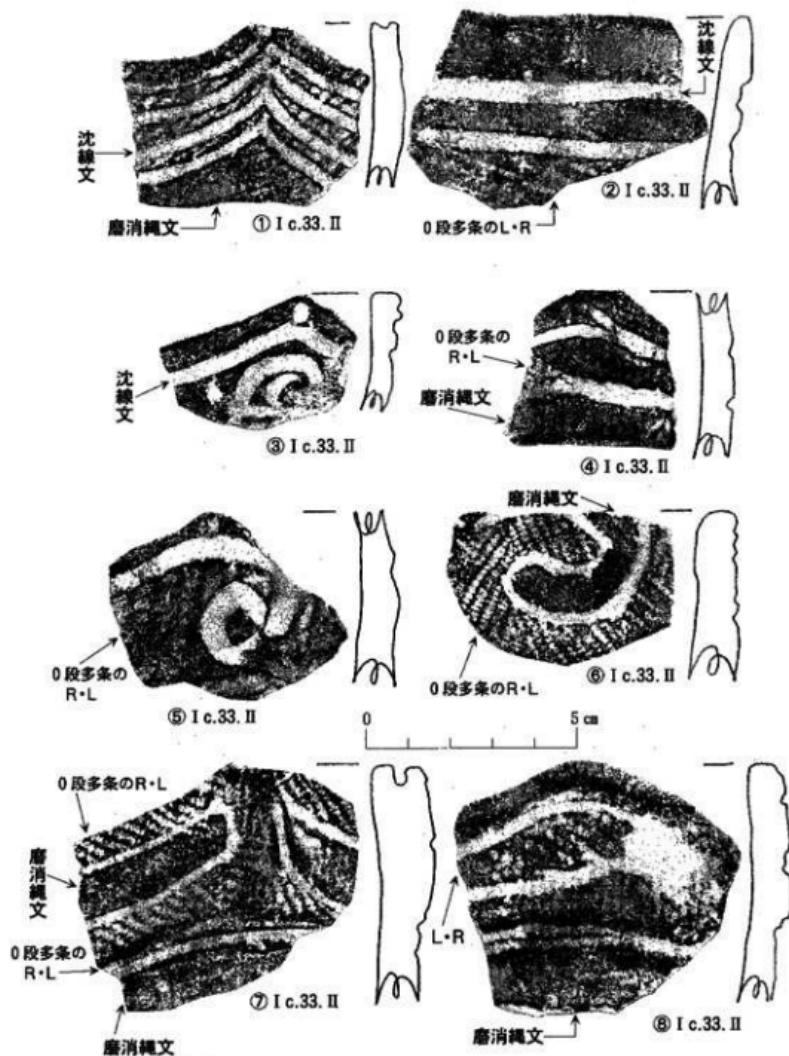


①～⑥→中期末の土器

図版6 [大木系] -その3-

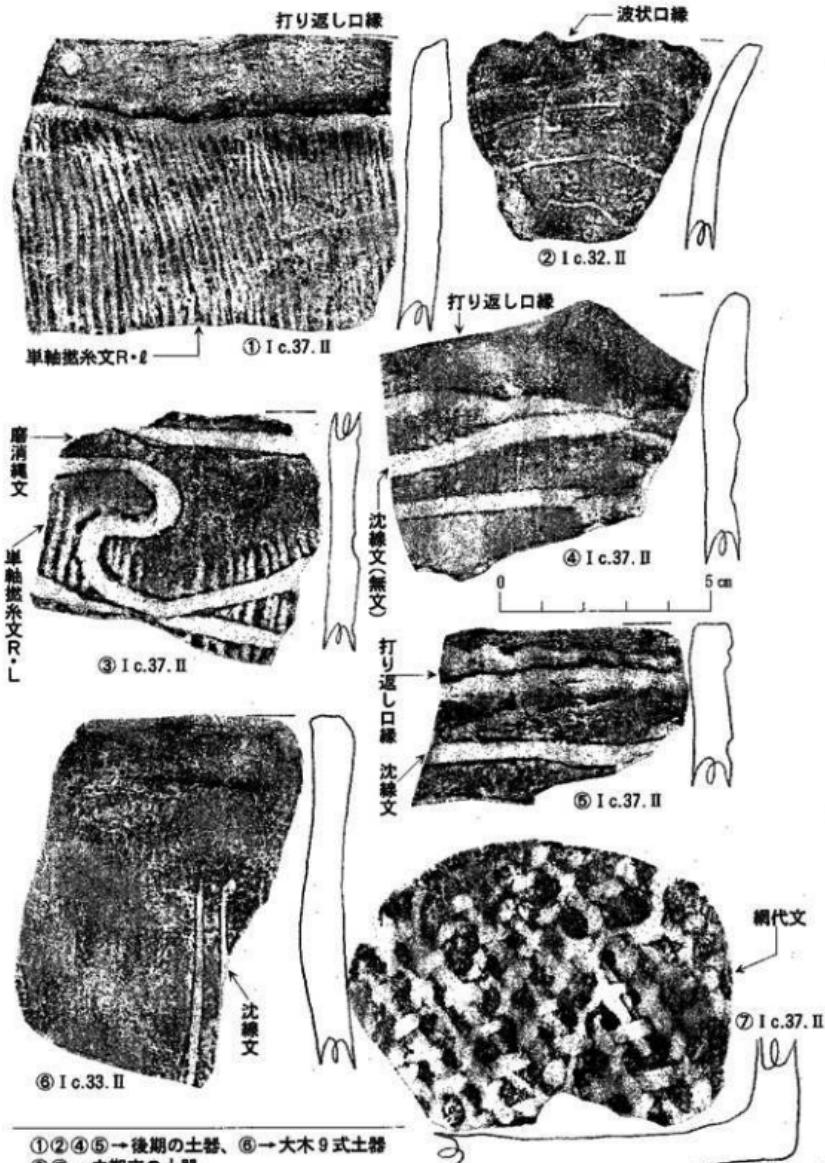


図版7【大木系・後期の土器】-その4-



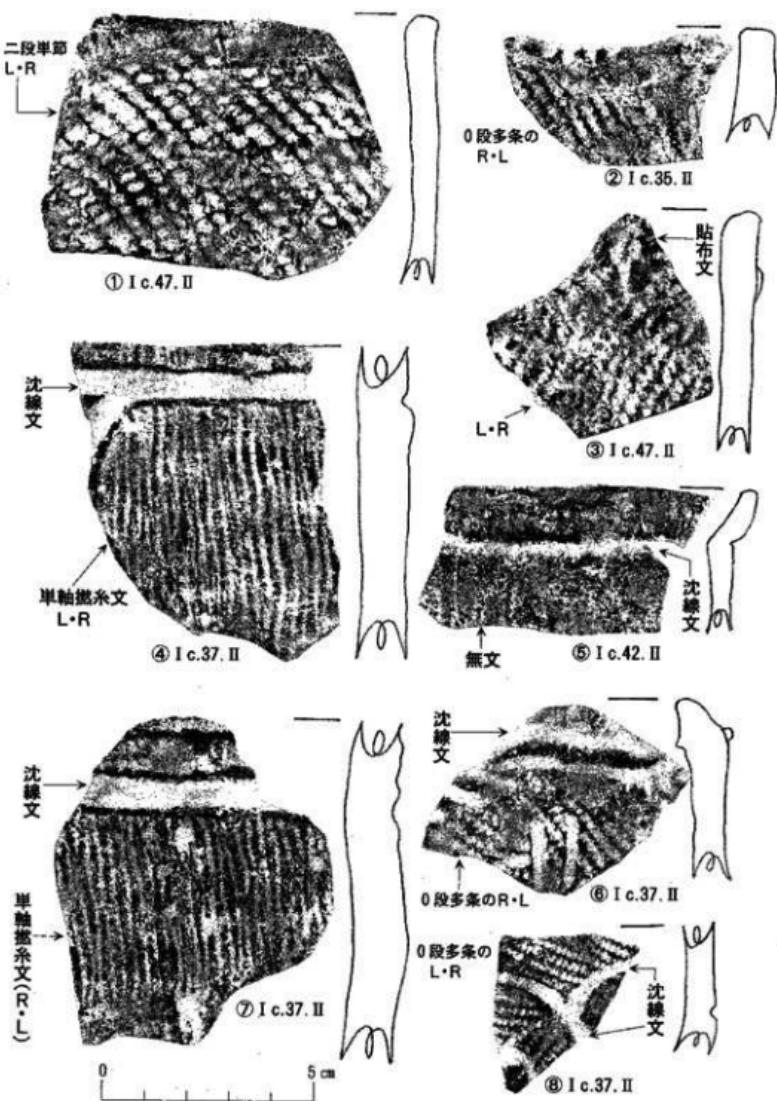
①②④～⑧→中期末の土器、③→後期の土器

図版8 [大木系・後期の土器] -その5-



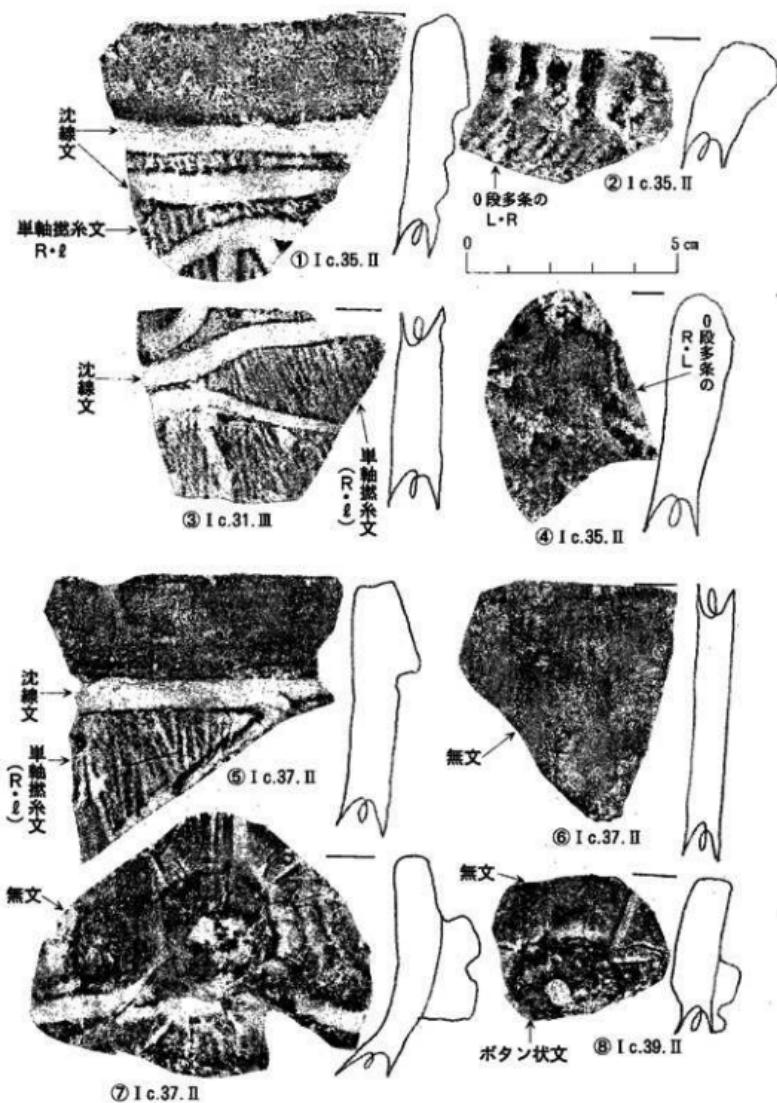
①②④⑤→後期の土器、⑥→大木9式土器
③⑦→中期末の土器

図版9 [大木系・円筒系・後期の土器]



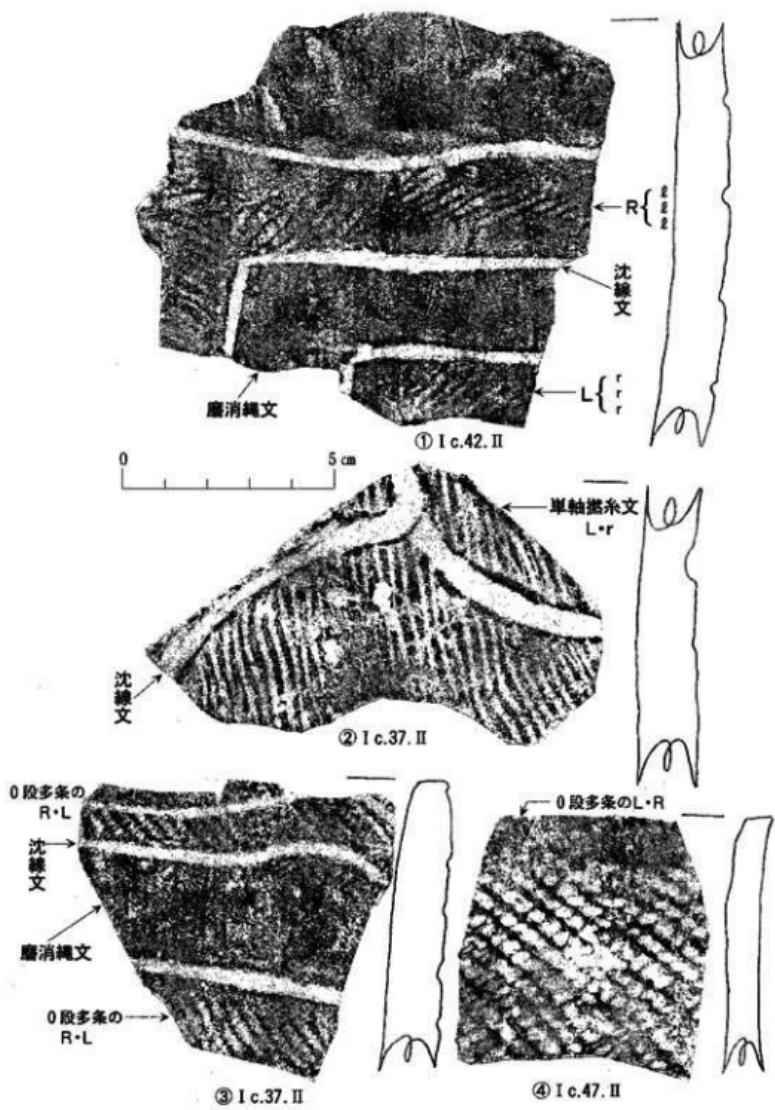
①⑤→後期の土器、②③⑥→中期の土器、④⑦⑧→中期末の土器

図版10〔大木系・円筒系・後期の土器〕



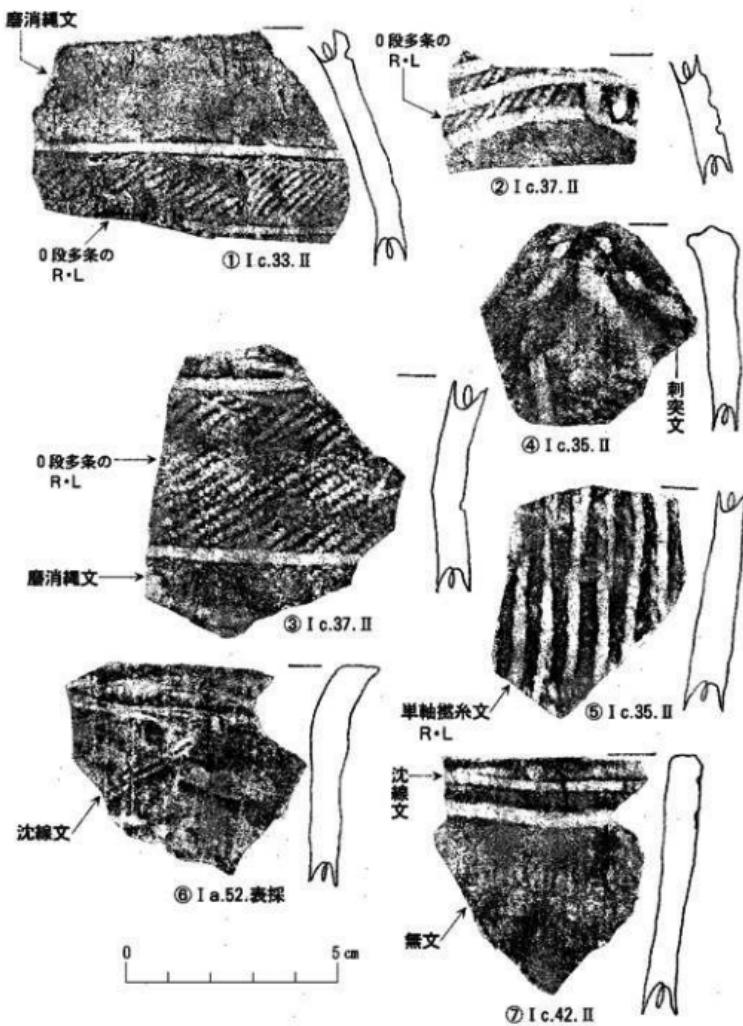
②④→中期の土器、①③⑤⑦⑧→中期末の土器、⑥→後期の土器

図版11〔大木系・後期の土器〕



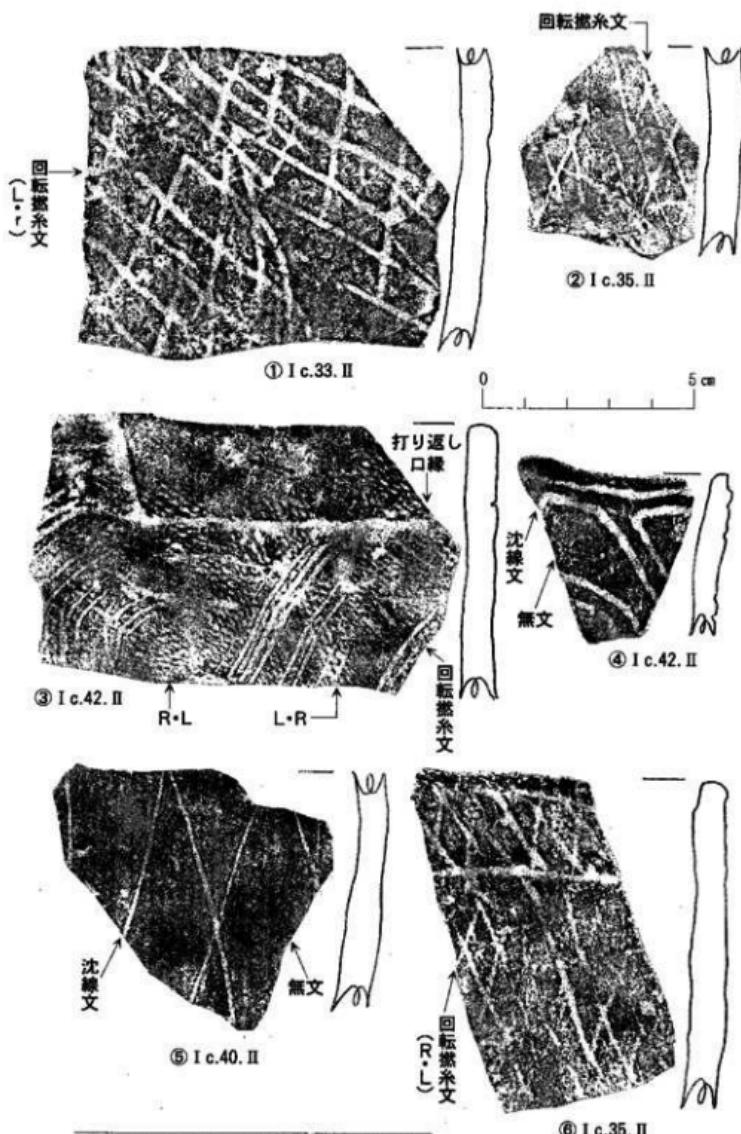
①④→後期の土器、②③→中期末の土器

図版12 [大木系・後期・砂沢期の土器]



①③④⑤→中期末の土器、⑥⑦→後期の土器、②→砂沢期の土器(亦生期)

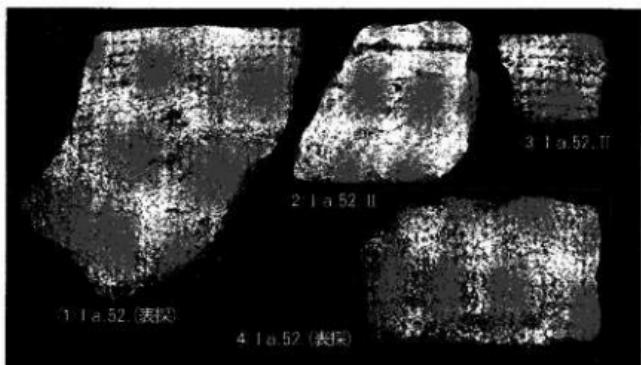
図版13 [後期の土器]



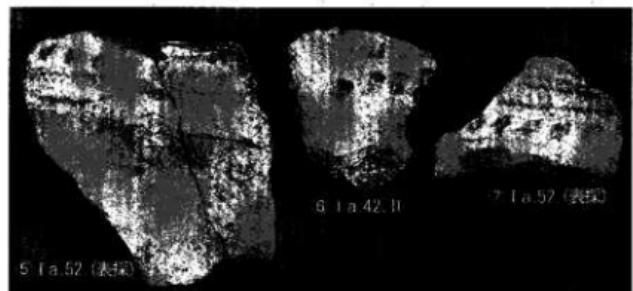
①～⑥→後期の土器（十慶内I式土器）

写真1【円筒系土器】—その1—

I



II



III

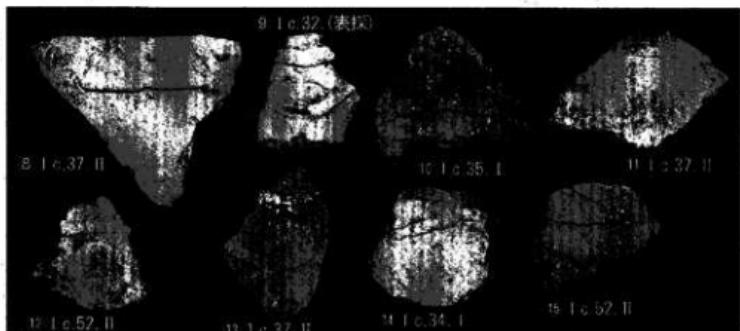


写真2 [円筒系土器・馬骨・須恵器・土師器・円盤状土製品]

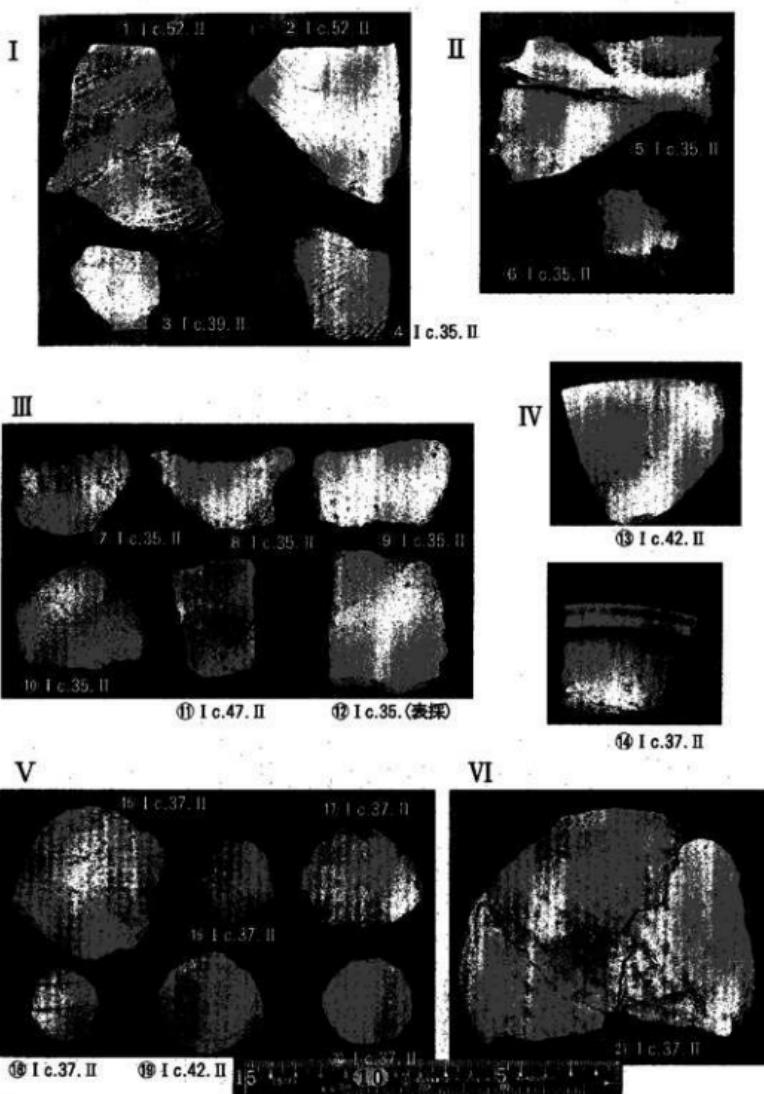


写真3【大木系土器】-その1-

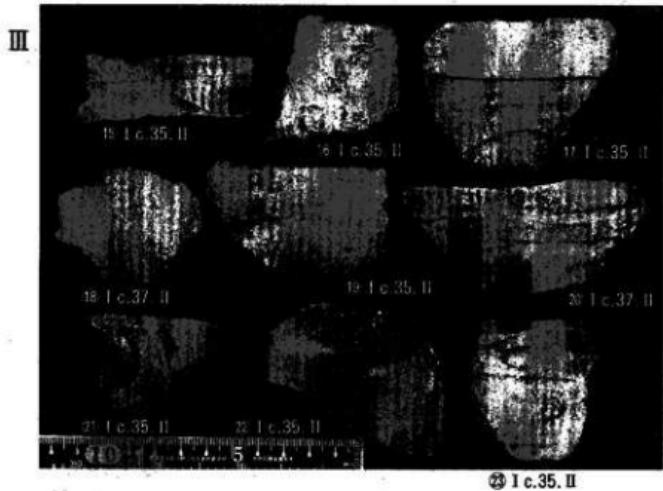
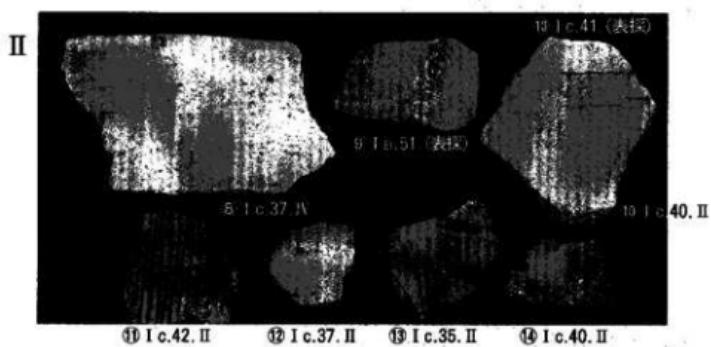
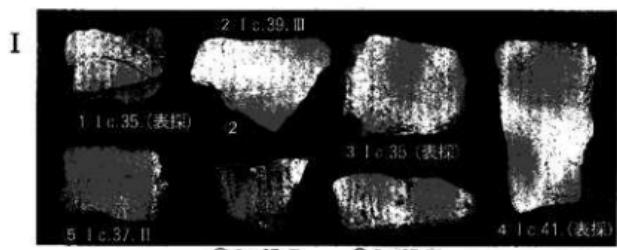


写真4 [大木系土器] -その2-

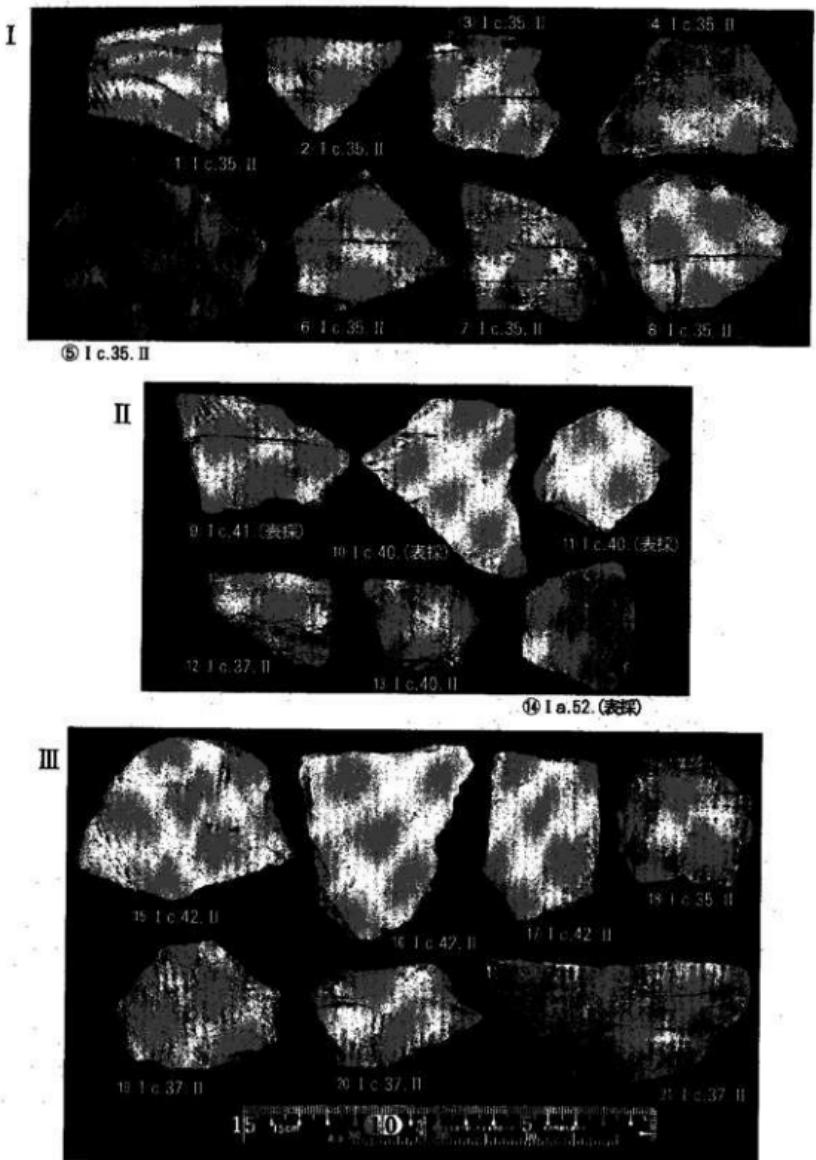


写真5【大木系土器】—その3—

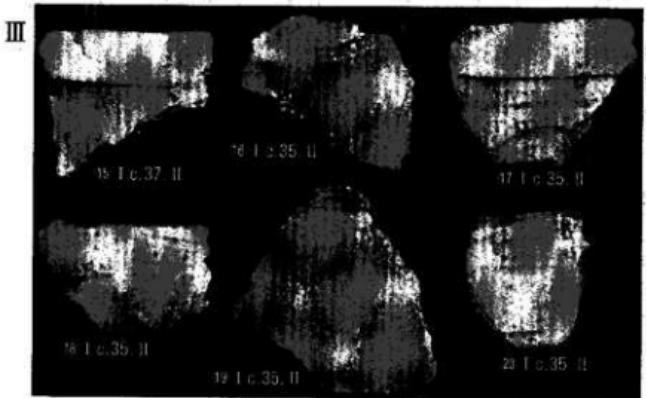
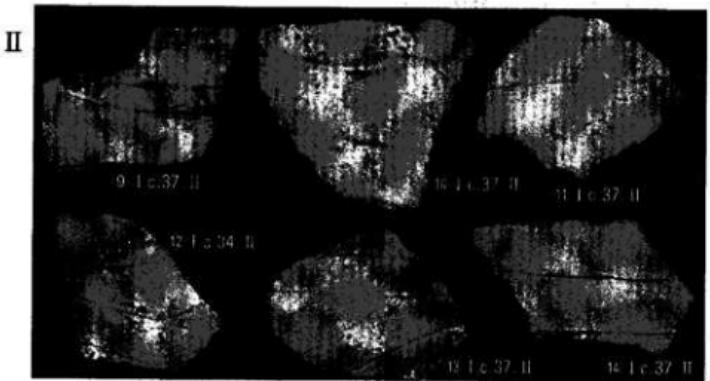
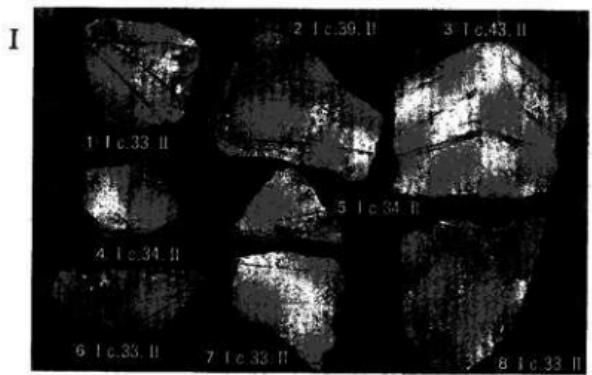
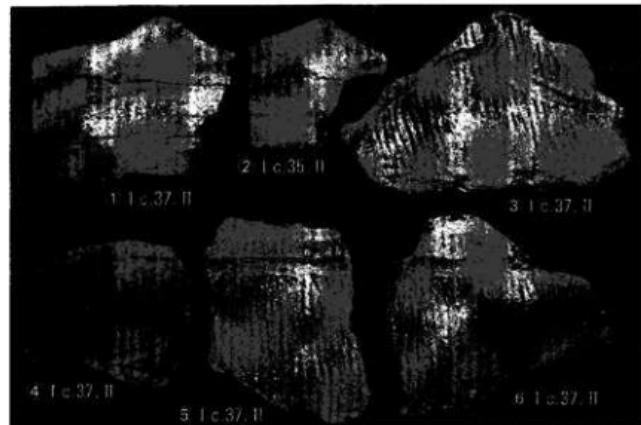
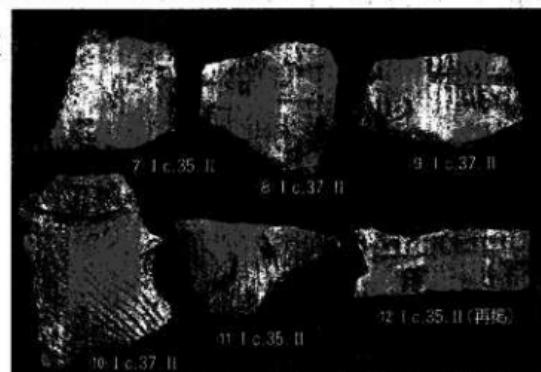


写真6【大木系土器】—その4—

I



II



III

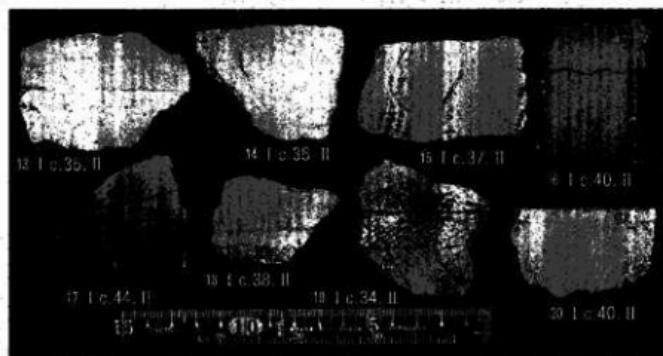


写真7【大木系土器】-その5-

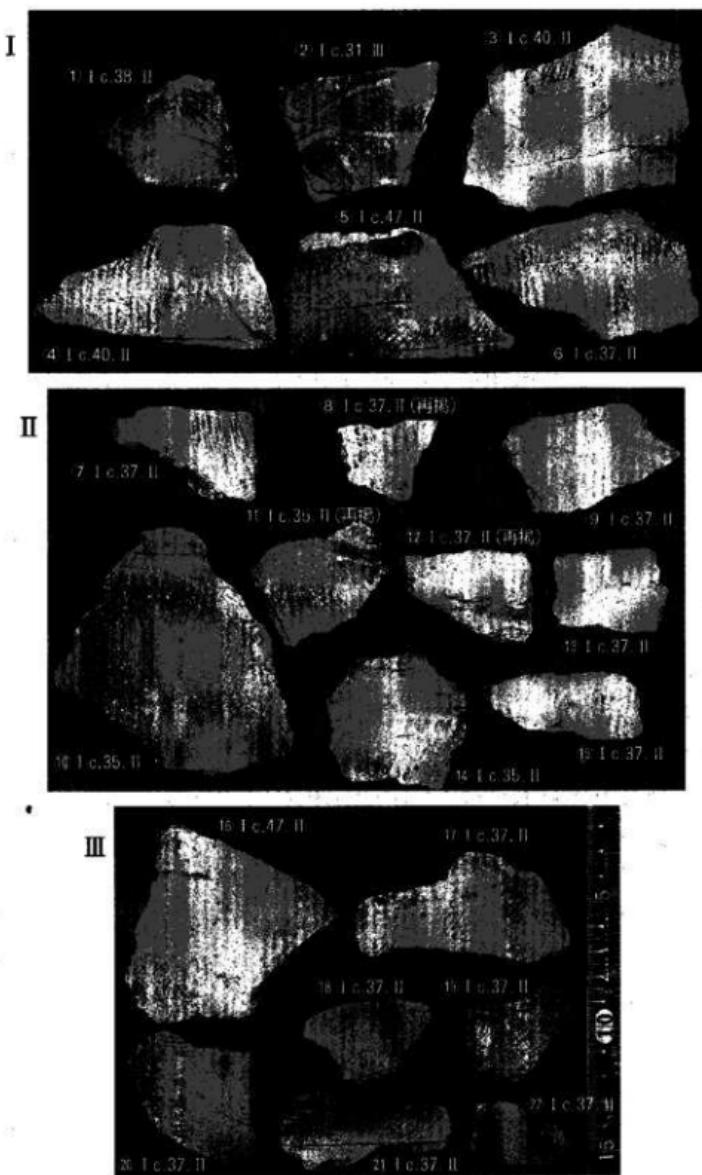


写真8〔後期の土器〕—その1—

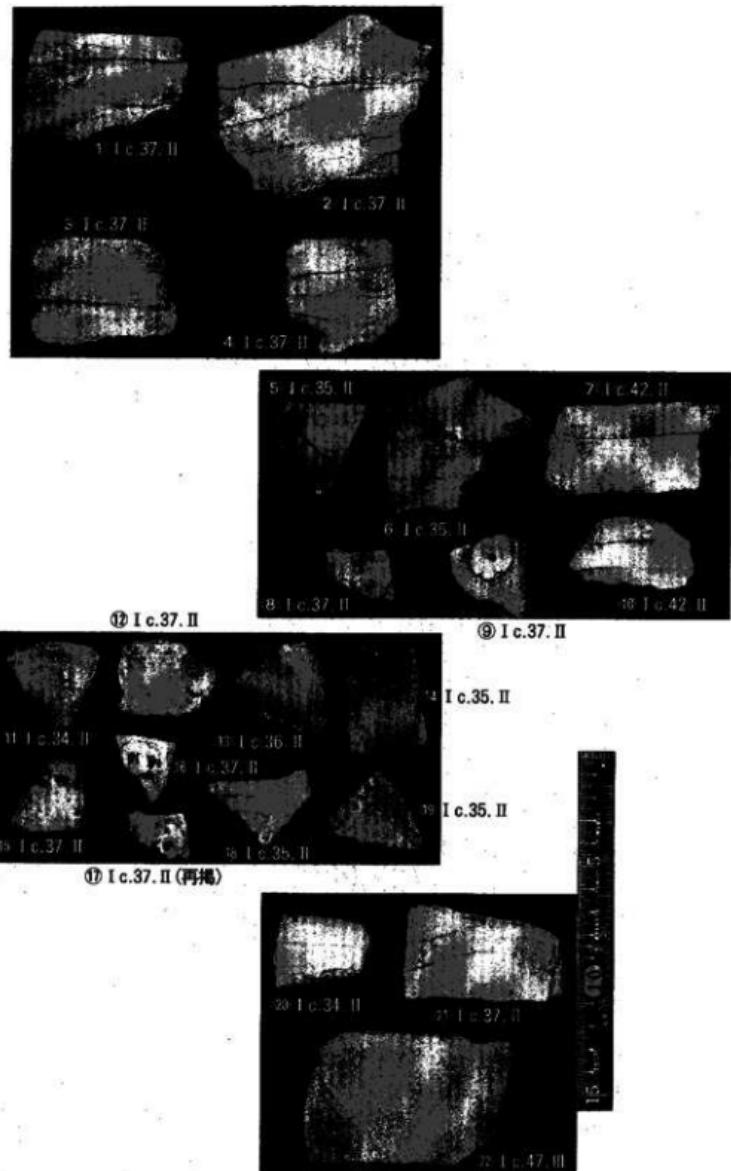


写真9【後期の土器】—その2—

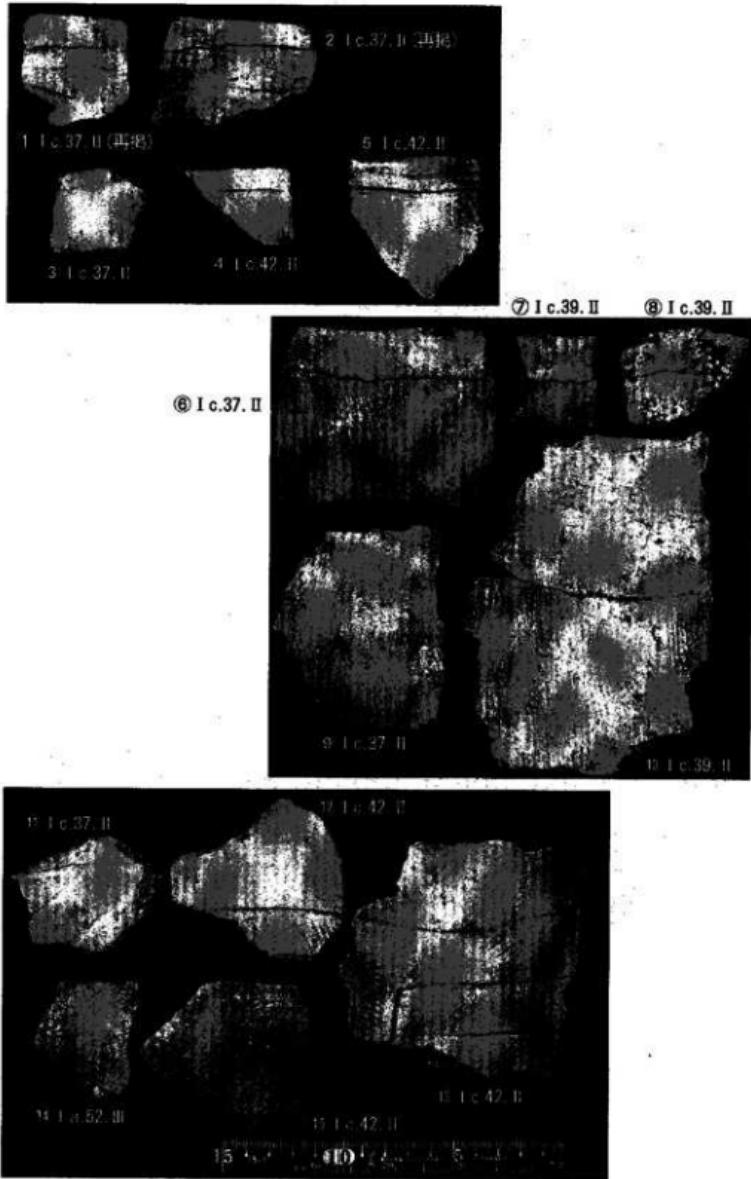
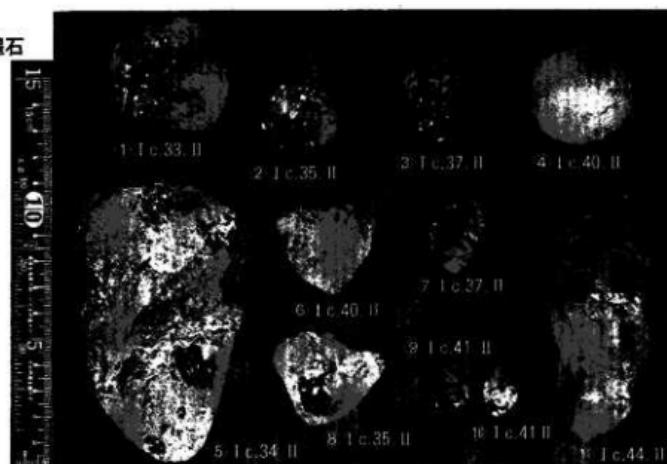


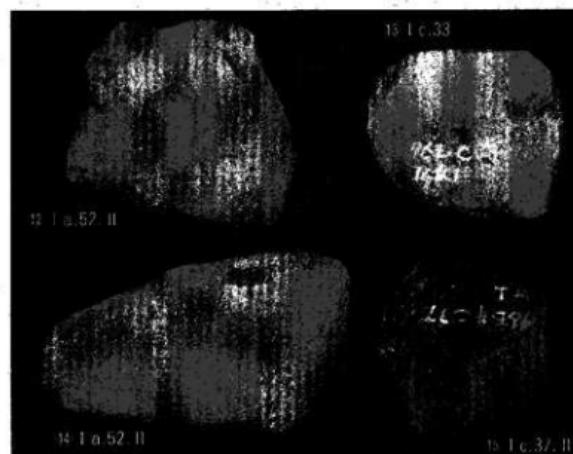
写真10【黒曜石・クボミ石・石錐】-その1-

①～⑪
=黒曜石



⑫=石錐

⑬～⑯=クボミ石



⑭=石錐

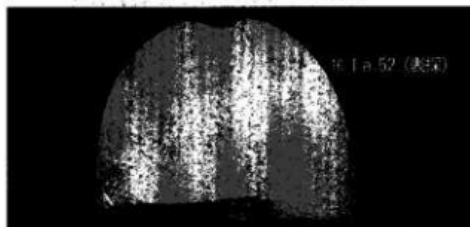
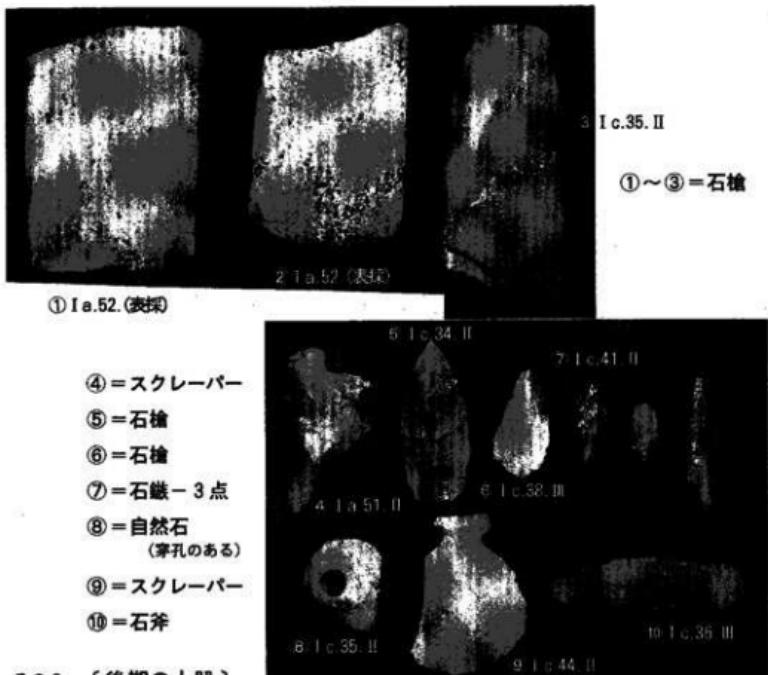


写真11〔石 器〕—その2—



22 I c.33. II

森田村埋蔵文化財シリーズ 第5集

玉井(1)遺跡

発行所 青森県西津軽郡森田村教育委員会

所在地 青森県西津軽郡森田村大字山田字山崎61
TEL 0173-26-2111
FAX 0173-26-2114

印刷所 ㈱西北印刷
TEL 0173-35-1303
FAX 0173-35-1308